

ヴェルナー・イエーガーの「第三の人文主義」と、その根源

曾 田 長 人

序

ヴェルナー・イエーガー（Werner Jaeger）は、20世紀のドイツ、アメリカ合衆国で活動した古典文献学者である。彼は1920年代から30年代にかけて、ドイツ語圏での古典語教育・古典研究において重要な役割を演じ、古典復興の精神運動である、いわゆる「第三の人文主義（der Dritte Humanismus, Dritter Humanismus）」の代表者となった。「第三の人文主義」の影響は西ドイツにおいて1970年代初期まで及び、「まさに第二次世界大戦後、この作品（『パイデИАー ギリシアにおける人間形成』¹⁾－引用者注。以下、引用文内のかっこは引用者による）は古典語の専門教授法において、人文主義の基礎的な作品としてしばしば古典語授業を基礎づけるために引用された」²⁾。しかし古典語教育のステイタスの低下を伴う文教改革（1972年）およびいわゆる「過去の克服」の本格化とほぼ並行して、「第三の人文主義」は反省の対象となった。なぜならイエーガーが活動した時期は、ドイツでナチスが台頭し、やがて政権を握る時期と重なっており、彼の「第三の人文主義」はナチズムと両義的な関わりを持ったからである（後述）。例えば古典文献学者のマンフレット・ラントフェスター（Manfred Landfester）は、次のように述べている。「自らの本質および機能からして批判的なユートピア概念であったパイデИАーという概念は、ナチス国家を正当化するため公然と用いられた。このことによって、パイデИАーという概念は当時の状況におけるその本来の機能のみならず、未来にわたってその道徳的な説得力を失った」³⁾。1990年にはアメリカ合衆国

1) イェーガーの主著。以下『パイデИАー』と略。「パイデИАー Paideia」は古代ギリシア語で「教育、教養、文化」等を意味する。イエーガーはこの概念を軸に、古代ギリシアの精神史を描いた。

2) Kuhlmann, Peter: Humanismus und Alte Sprachen im Dritten Reich, in: Archiv für Kulturgeschichte, Bd.88, 2006, S.419.

3) Landfester, Manfred: Die Naumburger Tagung „Das Problem des Klassischen und die Antike“ (1930) . Der

のイリノイ大学でイエーガーの学問的な業績、政治的な役割等を包括的に再検討するシンポジウムが開催された。このシンポジウムにおいても、彼の業績を全体的に低く評価する結果に終わっている⁴⁾。しかし近年、彼が構想した人文主義のプログラムおよびこのプログラムが人文主義のステータスの維持に貢献したことへ積極的な評価を下す論者もあり⁵⁾、彼の古典研究の再評価を求める論文が発表されている⁶⁾。2013年には「ヴェルナー・イエーガー 学問・教養・政治」と題する会議が、ベルリン・フンボルト大学アウグスト・ベーク古代センターの主催の下に開催された⁷⁾。こうして近年のドイツにおいてはイエーガーおよび彼の「第三の人文主義」への関心の高まりが観察される。他方、日本においてイエーガーおよび彼の「第三の人文主義」は、教育学、古典文献学、古代哲学、教養史の専門家を除けば、一般的にその名前や内容がよく知られていないとはいえない。

本論においては、上で触れた内外でのイエーガーおよび彼の「第三の人文主義」の受容を踏まえ、まずイエーガーの経歴をまとめる（第1章）。引き続き、彼の「第三の人文主義」の内容について検討し（第2章）、「第三の人文主義」の根源について考察を行う（第3章）。こうした作業によってイエーガーおよび彼の「第三の人文主義」を紹介し、それを近代ドイツの思想史的な文脈に位置付けることを目指す。「人文主義」とは多義的な概念であるが、以下「人文主義」とは、古代ギリシア・ローマを師表とし、人間や文化の形成を目指す精神運動を意味することを予め断っておく。

第1章 イェーガーの経歴

イエーガーは1888年、当時のラインラント、今日のノルトライン・ヴェストファーレンにあるロッペリヒで生れた。彼は高校卒業資格を得た後、1907年の夏学期にマールブルク大学で古典文献学と哲学の勉学を始めた。当地で新カント学派の哲学者パウル・ナトルプ（Paul Natorp）が、イエーガーにプラトーンへの関心を掻き立てた。一学期後、イエーガーはベルリン大学へと移り、そこで高名な古典文献学者であるヘルマン・ディールス（Hermann Diels）の下で博士の学位を取得した。彼の博士論文は、アリストテレス『形而上学』の成立史を主題とした。イエーガーは、同書の成

Klassikbegriff Werner Jaegers: Seine Voraussetzung und seine Wirkung, in: *Altertumswissenschaft in den 20er Jahren. Neue Fragen und Impulse*, hrsg.v. Hellmut Flashar, Stuttgart 1995, S.40.

4) Werner Jaeger Reconsidered. Proceedings of the Second Oldfather Conference, held on the campus of the University of Illinois at Urbana-Champaign, April 26-28, 1990, edited by William M. Calder III, Atlanta 1991.

5) Mensching, Eckart: Über Werner Jaeger im Berlin der zwanziger Jahre (Schluß), in: *Nugae zur Philologie-Geschichte*, Bd. IV, Über U. v. Wilamowitz-Moellendorff, W. Kranz, W. Jaeger u.a., Berlin 1991, S.104.

6) 「(個人と国家の関わりという)問題を、古代学の最高の水準において政治的に考え抜いた(イエーガーのような)著者に関する研究は、行う価値がある」(Mehring, Reinhard: *Humanismus als «Politicum»*. Werner Jaegers Problemgeschichte der griechischen «Paideia», in: *Antike und Abendland. Beiträge zum Verständnis der Griechen und Römer und ihres Nachlebens*, Bd. XLV, 1999, S.128.)

7) 詳しくは、以下のサイトを参照。 http://www.antikezentrum.hu-berlin.de/veranstaltungen/kalen/der/jaeger_pdf-1

立の様々な局面が時代的に異なること、教授内容と概念的な構成の変化を明らかにした。これによって同書が、以前の研究が仮定したように統一的な構造からなるのではなく、様々な講演の組み合わせからなることを証明した⁸⁾。こうした画期的な証明は専門家の間で高い評価を得、若きイエガーに学者としての確固たる名声をもたらした。彼は博士の学位の取得後、ドイツ第二帝国における代表的な古典文献学者であったベルリン大学教授ウルリヒ・フォン・ヴィラモーヴィッツ＝メレンドルフ (Ulrich von Wilamowitz-Moellendorf) の下で研究を行った。4世紀の新プラトーン主義に属する古代ギリシアの教父、エメサのネメシオス (Nemesios von Emesa) に関する論文で教授資格を取得した後、イエガーは1914年バーゼル大学古典文献学科の員外教授へと招聘された。翌年、彼は正教授としてキール大学へ移った。1921年にはヴィラモーヴィッツ＝メレンドルフの後任としてベルリン大学へ招聘され、1936年に至るまで古典文献学の講座を担当した。このベルリン時代、彼は「第三の人文主義」に関する自らのプログラムを練り上げた。

1933年ナチスが政権を掌握した際、イエガーは著作活動によって、自らの教養理念が新体制に適合することを説明しようと試みた⁹⁾。すでに「第三の人文主義」の代表者として大きな名声を得ていた彼のかかる態度は、ナチズムへの去就を決しかねていた同僚の人文主義者に影響を与えたことが推測されている¹⁰⁾。しかしイエガーのこうした適合の試みは、エルンスト・クリーク (Ernst Kriek) を始めとする、ナチズムを奉じる教育学者、古典文献学者、古代史家に拒否された。なぜなら彼らにとってイエガーの「第三の人文主義」はあまりにも知的で、生命力に乏しく¹¹⁾、民族的でない¹²⁾と思われたからである。イエガーが当初ナチズムへ寄せた好意的な態度は主に1970年代以降、「アリ」¹³⁾として批判された。ところでナチスの政権掌握後、彼は自らの教養理念をドイツ第三帝国で実現することが困難であることに気付いた¹⁴⁾。かかる不如意な社会状況の下、イエガー

8) Jaeger, Werner Wilhelm: Studien zur Entstehungsgeschichte der Metaphysik des Aristoteles, Berlin 1912.

9) Jaeger, Werner: Die Erziehung des politischen Menschen und die Antike, in: Volk im Werden, Bd.1, Heft 3, 1933, S.43-49. この雑誌は、教育学のナチズム的な理念を表現するために創刊された。

10) Calder III, William M.: Werner Jaeger, in: Berlinische Lebensbilder. Geisteswissenschaftler, hrsg. v. Michael Erbe, Berlin 1989, S.357.

11) Berve, Helmut: Antike und nationalsozialistischer Staat, in: Vergangenheit und Gegenwart. Zeitschrift für Geschichtsunterricht und politische Erziehung, Jg.24, 1934, S.264.

12) Kriek, Ernst: Unser Verhältnis zu Griechen und Römern, in: Volk im Werden, Bd.1, Heft 4, 1933, S.77.

13) Fuhrmann, Manfred: Die humanistische Bildungstradition im Dritten Reich, in: Humanistische Bildung, Heft 8, 1984, S.152. 「イエガーは一時的ではあるが、新しい (ナチズムの) 「運動」に教育的な世界観を引き渡すことができるという野心的な妄想に憑かれた」(Hölscher, Uvo: Angestrenktes Griechentum. Die dritte Wiederkehr des Klassischen. Zu Werner Jaegers 100. Geburtstag, in: Frankfurter Allgemeine Zeitung 30.7.1988, S.19) 等の指摘も参照。

14) これについてイエガーはアメリカ合衆国への移住直後に刊行された講演集の序文で、イエガーの「第三の人文主義」によるプログラムの取り組みが行われた時代は、今日 (1936年) とは異なると記している (Jaeger,

は、ニュルンベルク人種法が制定され彼の二人目のユダヤ系の妻との離婚を迫られたこともあり、1936年シカゴ大学からの招聘を受け、妻や子供と共にドイツを去った。イエーガーがアメリカ合衆国へ移住した後も、彼の「第三の人文主義」はドイツの古典語教育・古典研究に隠然たる影響を持続的に及ぼした。この事実およびナチズムとイエーガーの教養理念との相違¹⁵⁾は、ナチズムを信奉する古典文献学者を後に至るまでに苛立たせ、彼らの中には「第三の人文主義」を公に批判する者もいた¹⁶⁾。イエーガーとナチズムとの関わりは、未だに解明し尽くされていない複雑な問題である¹⁷⁾。

1934年から1947年にかけて、イエーガーの主著『パイデイアー』が刊行された。1939年、彼はハーヴァード大学へと招聘され、1961年の死に至るまで同大学で教鞭を執り、研究を行った。彼はアメリカ合衆国に移住した後、以前ドイツにいた時のように学派を形成することはなかった。そして、とりわけギリシア思想がキリスト教神学の形成に及ぼした影響について研究を行った¹⁸⁾。

第2章 イェーガーの「第三の人文主義」

本章においては、まず「第三の人文主義」という呼称における「第三」の意味に触れ（第1節）、「第三の人文主義」の背景としての4種の危機について考察する（第2節）。さらに「第三の人文主義」の内容を、かかる危機を打開する試みとして検討する（第3節）。

Werner: Vorwort, in: Humanistische Reden und Vorträge, Berlin 1937)。同書に注9の論説は収録されなかった。

15) 知性と感情、精神と身体に関わりをめぐってイエーガーは前者、ナチズムは後者を重視した等。

16) Drexler, Hans: Der Dritte Humanismus. Ein kritischer Epilog, Frankfurt am Main 1942. s. Eberhardt, Walther: Die Antike und wir, in: Nationalsozialistische Monatshefte, Bd.6, 1935, S.117. Gohlke, Paul: Die aristotelische Frage, in: Die Alten Sprachen, Bd.4, 1939, S.122f. 等。ハンス・ドレクスラー(Hans Drexler)は1943～45年、ゲッティンゲン大学の学長を務めた。

17) イェーガーのアメリカ合衆国への移住は亡命ではなく、「おそらく彼の国際的な名声を顧慮して、“(ナチ・ドイツの)学問・教育・文化相が彼に(シカゴ大学の)招聘を受け入れる許可を、彼の(ドイツでの)学術的な業績に感謝しつつ与えた”」(Losemann, Volker: Nationalsozialismus und Antike, Hamburg 1977, S.43)。イエーガーはアメリカ合衆国へ移住した後も、異例なことにナチズムの時代を通してドイツで自著の出版を許された。しかし他方でミュンヘン情報局(IfZ)による1941年12月6日、第5号の通達として、「イエーガーに触れる際には、非常に慎重にし、事前に文化機関、新聞局(ZP)と協議を行うことが望ましい」(A.a.O., S.43, 204. この文章の教示を著者のフォルカー・ローゼマン博士[Dr. Volker Losemann]に感謝する)とあり、イエーガーがナチスにとって要注目人物であったことが伺える。イエーガーの思想に関しても、『パイデイアー』の中にはナチズムが愛好した語彙や思想が散りばめられている一方、彼はナチズムが依拠した人種による決定論を退け、人間の陶冶を重んじている場合がある(イソクラテースによる「パンアテーナイ祭演説」51からの「ギリシア人の血を引く者ではなく、我々のパイデイアーに与る者こそギリシア人だ」が共感を込めて引かれる[Jaeger, Werner: Antike und Humanismus, in: Humanistische Reden und Vorträge, Berlin 1960, S.109]等)。前者あるいは後者のどちらをイエーガーの思想にとって本質的なものと見なすべきなのか、一義的な解答は困難に思われる。

18) Jaeger, Werner: Early Christianity and Greek Paideia, Cambridge Mass. 1961 (ヴェルナー・イエーガー『初期キリスト教とパイデア』[野町啓訳、筑摩書房、1964年])を参照。

第1節 「第三の人文主義」中の「第三」とは？ 「第三の人文主義」と「第三帝国」

最初に「第三の人文主義」という名称における「第三」という序数がどこに由来するのか、説明を試みたい。20世紀初期に至るヨーロッパの文化史においては、ギリシア・ローマ古典古代の受容、つまり人文主義が隆盛に達した2つの時期が存在した。すなわち主に15世紀から16世紀にかけてイタリアを中心として展開したルネサンス、18世紀後期から19世紀初期にかけてのドイツにおける古典主義の時期である。前者の人文主義は「古人文主義Althumanismus」、後者の人文主義は「新人文主義Neuhumanismus」とも呼ばれる。19世紀の末期から1930年代にかけてのドイツにおいては、古代ギリシアから同時代の文化運動への刺激を汲み取ろうとする様々な試みが生まれた¹⁹⁾。ニーチェから大きな影響を受けたシュファン・ゲオルゲ（Stefan George）および彼を取り巻くゲオルゲ・クライスによるギリシア崇拜が、その例として挙げられる。というわけで、こうした一連の古代ギリシア復興の運動が、古人文主義、新人文主義に次ぐ「第三の人文主義」と名付けられたのは、不思議ではない。最初にこの呼称を用いたのは、教育学者のエドゥアルト・シュプランガー（Eduard Spranger）である。彼は1921年、上述の運動を「第三の人文主義」と名付け、これを新人文主義から、「我々近代人が得られる、探究と理解の広さ」によって区別した²⁰⁾。かかる理解に基づいてバルバラ・シュティーヴェ（Barbara Stiewe）のような研究者は「第三の人文主義」を、ゲオルゲ・クライスによる古典古代の芸術的な受容も含めた広い意味で捉えている²¹⁾。しかし本論において「第三の人文主義」という場合、イエーガーを中心とする学問的・教育的な運動に限定することを予め断っておく。

イエーガーは自らの学問的・教育的な運動を「更新された」人文主義と名付けていた。彼は1933年になってようやく「第三の人文主義」という呼称を、自らの関心を示すために用い始めた²²⁾。

「第三の人文主義」と「第三帝国」は、しばしば関連付けられた²³⁾。なぜなら両者は共に「第三」という序数を含み、ナチスが政権を握る以前から、「第三の人文主義」による文化上の革新を、来たるべき「第三帝国」による政治上の革新と重ねて捉える期待が存在したからである²⁴⁾。両者の関

19) s. Wüst, Ernst: Die Erneuerung des Humanismus, in: Bayerische Blätter für das Gymnasial-Schulwesen, Bd.45, Heft 1, 1929, S.1-13. >Mehr Dionysos als Apollo<. Antike-Rezeption um 1900, hrsg. v. Achim Aurnhammer u. Thomas Pittrof, Frankfurt am Main 2002.

20) Spranger, Eduard: Aufruf an die Philologie (an Stelle der Vorrede), in: Die gegenwärtige Stand der Geisteswissenschaften und die Schule, Berlin 1922, S.10.

21) Stiewe, Barbara: Der Dritte Humanismus. Aspekte deutscher Griechenrezeption vom George-Kreis bis zum Nationalsozialismus, Berlin 2011.

22) Jaeger, W.: Die Erziehung des politischen Menschen und die Antike, a.a.O., S.44. Stiewe, B.: a.a.O., S.306.

23) Nickel, Rainer: Der Mythos vom Dritten Reich und seinem Führer in der Ideologie des humanistischen Gymnasiums vor 1945, in: Paedagogica Historica, Bd. X, 1, 1970, S.113. Stiewe, B.: a.a.O., S.285-306.

24) Helbing, Lothar: Der Dritte Humanismus, Berlin 1932, S.9f..

連が単に名称上の偶然に過ぎないのか、それとも両者の本質に関わる関連なのか、という問いは、先に触れたイエーガーとナチズムとの関わりの問題と重なり、この問いに答えるのは難しい。アンドレアス・フリッチュ（Andreas Fritsch）は、イエーガーよりもむしろゲオルゲ・クライスを担い手とした「第三の人文主義」とナチズムとの関わりに両者の関連が当てはまることを主張している²⁵⁾。

第2節 「第三の人文主義」の背景としての、4種の危機

引き続き「第三の人文主義」の成立背景としての4種の危機、すなわち学校政治上（Ⅰ）、学問上（Ⅱ）、社会政治上（Ⅲ）、文化上（Ⅳ）の危機について検討を行う。こうした検討を行う理由は、「第三の人文主義」は上述の危機への対応として解釈できるからである。

Ⅰ. 学校政治上の危機

18世紀中期、新人文主義の嚆矢であるヨーハン・ヨアヒム・ヴィンケルマン（Johann Joachim Winckelmann）はいわゆるアポロロンの古代ギリシア像を発見し、これにきわめて高い文化的な価値を付与し、同時代ドイツの多くの文人・芸術家に古代ギリシアへの憧れを喚起した。その後、彼の影響下、ゲーテやシラーなどドイツ古典主義の詩人による、多くの優れた文学作品が創造された。これは当時の学校政治へと影響を及ぼした。ナポレオン戦争におけるプロイセンの敗北（1806年）後、ギムナジウムが中等教育機関としてドイツのほぼ全ての諸領邦国家において制度化された。このギムナジウムでの授業の重点は、古典語、特に古代ギリシア語の習得に置かれた。なぜなら一方で、古代ギリシア語との取り組みは、当時、政治的・文化的に分裂状態にあったドイツ人のアイデンティティの形成に寄与すると考えられたからである（ドイツと古代ギリシアとの親縁性が前提され、この親縁性はラテン的なフランスとローマとの親縁性に対置させられた）。他方で、「形式陶冶formale Bildung」という古典語教育上のコンセプトが考え出された。このコンセプトによれば、古典語の学習によって学習者は対応した思考や行為の形式－論理的な思考力、規律などを体得することができるという。その際、国家よりも個人の形成が第一義的な目的とされた。こうして古典語、特に古代ギリシア語の習得が国民教育のみならず個人の一般教養として重視された²⁶⁾。さらにギムナジウムは、ドイツにおける市民階級の形成とも関連していた。なぜならギムナジウムへ通うことは、身分や出自ではなく教養によって個々の市民が社会的な上昇を遂げる道を開いたからであ

25) Fritsch, Andreas: „Dritter Humanismus“ und „Drittes Reich“. Assoziationen und Differenzen, in: Schule und Unterricht im Dritten Reich, hrsg. v. Reinhard Dithmar und Wolfgang Schmitz, Neuwied 2003, S.156f..

26) 以下、19世紀ドイツにおける古典語教育・古典研究の全般的な状況については、拙著『人文主義と国民形成 19世紀ドイツの古典教養』（知泉書館、2005年）第2部を参照。

る（ギムナジウムの卒業者のみが、大学で勉強することを許された）。教養市民は、彼らが享受した共通の古典教養によって連帯感を得た。古代ギリシア人が抱いた自由の思想は、古典語教育・古典研究を通してギムナジウムの生徒や大学の学生へ伝わり、期せずして彼らに影響を及ぼした。それゆえ新人文主義が三月革命前期、しばしば政治的な自由主義と関連付けられ、体制から危険視されたことは不思議ではなかった²⁷⁾。

ギムナジウムによるこうした、どちらかという解放的な性格は19世紀の三月革命以後、変化し始めた。市民階級が国民主義化、保守化する傾向、労働運動の活発化と軌を一にして、人文主義ギムナジウム²⁸⁾においてはかつての個人的教養に代わって政治的教養が目的とされた²⁹⁾。この政治的教養は、存在する国家秩序の維持を目的としたのである。こうして支配的な教養概念が変化を遂げた社会的な背景は、以下のとおりであった。すなわち官憲はしばしば社会民主主義の勃興の一因が、人文主義ギムナジウムとその自由を重んじる気風にあると考えた。しかし人文主義者はかかる嫌疑から、彼らが教養を政治的教養として理解することによって逃れようとしたのである。人文主義者による新たな教養理解への期待は、プロイセン王ヴィルヘルム2世によって1890年に公布された最高勅令に現れた。この勅令は学校に対して、社会民主主義に対して闘うことを明確に要求したのである³⁰⁾。19世紀後期、人文主義ギムナジウムは主に3つの方面から激しい批判を受けた。第一に実科ギムナジウムの代表者は、19世紀を通して大きな進歩を遂げた自然科学の科目の必要性を強調した。第二に社会民主主義者は、人文主義ギムナジウムをその反動的な性格がゆえに批判した。第三にドイツ・ナショナリストは、人文主義ギムナジウムがコスモポリタンの的でドイツの民族性への教育を怠っているとしてこれを咎めた。かかる人文主義ギムナジウムの批判者は、人文主義ギムナジウムが時代遅れで、日々の要求に応じる能力がないという認識で一致していた。こうして人文主義ギムナジウムを取り巻く外的な環境の圧迫下、学校で教鞭を執る人文主義者は学校会議の結果、古典語の授業時間数を徐々に減らすよう強いられた。最終的に1900年、人文主義ギムナジウムは、大学への入学資格の独占的な付与権を放棄するに至った。

ドイツにおいては第一次世界大戦での敗戦後、新たな文教計画に関する様々なプランが練られた。その際、人文主義ギムナジウムに対する批判はますます激化した。こうした激しい批判は、19世紀中期以来、人文主義的な教養への主たる批判者であった右派と左派がヴァイマル共和国の時代、共

27) 同上 p.141.

28) 19世紀中期、中等教育機関として実科ギムナジウムが公に認可され、これと区別するため従来のギムナジウムの後身たる人文主義ギムナジウムという名称が生まれた。

29) Landfester, Manfred: Humanismus und Gesellschaft. Untersuchungen zur politischen und gesellschaftlichen Bedeutung der humanistischen Bildung in Deutschland, Darmstadt 1988, S.123-125.

30) A.a.O., S.123.

に影響力を増したことから理解できる。特に左派からの批判は人文主義者にとって危険であった。例えば共産主義者と社会主義者が多数派を占めたザクセンとチューリンゲンの州政府は1920年、中等教育段階での古典語授業を全廃した³¹⁾。

プロイセンにおいては1924年から25年にかけてハンス・リッヒャート (Hans Richert) の指導下、教育改革が行われ、全ドイツの学校組織へと波及した。この改革の結果、ドイツの本質と生成の核心である (ドイツ語、歴史、公民教育、地理、宗教からなる) 「文化理解を目的とする学科 kulturkundliche Fächer」が全中等教育機関の共通の授業科目とされた³²⁾。さらに人文主義ギムナジウム等と並ぶ第4の新たな中等教育機関として「ドイツ高等学校 Deutsche Oberschule」が新設され、このドイツ高等学校において古典語は教授されなかった。リッヒャートによる教育改革の結果、古典古代を模範とする要求は放棄され³³⁾、古典語との取り組みは自己目的ではなく、古代文化あるいは母国語を深く理解するための手段として位置付けられた。このリッヒャートの教育改革に基づく新しい古典語教育のあり方は、ヴィラモーヴィッツ＝メレンドルフが20世紀初期に構想した古典語教育のあり方と多くの共通点があった³⁴⁾。ヴィラモーヴィッツ＝メレンドルフは、文学のみならず実科的な科目も含めた様々なジャンルの古典テキストとの取り組みを勧め、古典教養の近代化を図った³⁵⁾。しかし、学校で教鞭を執る人文主義者の多くの反対を受けていたのである。

II. 学問上の危機

近代的な学問としての古典文献学は、ドイツでは新人文主義の時代に形成された。当時、一部の古典文献学者は、歴史学的・批判的な方法や事柄の知識の助けを借りて古典古代の文学を考察し始めた。こうした新しい研究の方向は、言語の知識のみと取り組んだ骨董的で古人文主義的な研究の乗り越えを図るものであった。ハレ大学、後にベルリン大学の古典文献学科教授となったフリードリヒ・アウグスト・ヴォルフ (Friedrich August Wolf) は19世紀初期、文学のみならず歴史、地理、宗教など古代の全生活を対象とする包括的な「古代学」の構想を発展させた。歴史学的な学問とし

31) Landfester, M. : Die Naumburger Tagung „Das Problem des Klassischen und die Antike“, a.a.O., S.13.

32) Preuß, Ute: Humainsmus und Gesellschaft. Zur Geschichte des altsprachlichen Unterrichts in Deutschland von 1890 bis 1933, Frankfurt am Main/Bern/New York/Paris 1988, S.131.

33) 「古代はもはや近代ドイツ文化の統一性を創造できない」 (Richert, Hans: Deutsche Bildungseinheit und die höhere Schule, Tübingen 1920, S.76.)

34) Preuß, U. : a.a.O., S.124f.. シュブランガーはヴィラモーヴィッツ＝メレンドルフが編纂した『ギリシア語読本』を「文化理解を目的とした学科の読本」と呼び、揶揄している (Spranger, Eduard: Zum kulturkundlichen Unterrichtsprinzip, in: Pädagogisches Zentralblatt, Jg.7, 1927, S.751)。

35) Wilamowitz-Moellendorf, Ulrich von: Der griechische Unterricht auf dem Gymnasium (1901), in: Kleine Schriften, Bd. VI, Berlin/Amsterdam 1972, S.83f..

ての古典文献学は、碑文集成や考古学の発掘の成果を取り入れることで隆盛に達した。こうした歴史学的で実証主義的な研究の方向は、未知の古代像を明るみに出し、近代人の精神的な地平を拡大した。しかし他方で新人文主義において要請された、古代ギリシアという最高の古典性の相対化を帰結として伴った。なぜなら歴史学的で実証主義的な研究は古代の近代に対する優位よりも、むしろ古代と近代との共通点、時として近代の古代に対する優位を明らかにしたからである。古典文献学者であった若きニーチェは、一方で古代ギリシアの最高の古典性、他方で古典文献学の歴史学的で実証主義的な研究方向を両立し得ないものとして捉えた。そして同僚の古典文献学者に、後者によって古典文献学が古典性の破壊という自己破壊へ陥る危険を先駆けて警告した³⁶⁾。こうした関連で、ニーチェとヴィラモーヴィッツ＝メレンドルフとの間の有名な論争が起きた³⁷⁾。ヴィラモーヴィッツ＝メレンドルフは、歴史学的で実証主義的な研究方向を擁護し、さらに発展、大成させたのである。ニーチェによる先駆的な問いかけは20世紀初期、プロテスタント神学、法学等の歴史学的な諸学を巻き込んだいわゆる「歴史主義の危機」として正体を現した。エルンスト・トロエルツシュ(Ernst Troeltsch)、フリードリヒ・マイネッケ(Friedrich Meinecke)等、著名な精神科学者が、この問いと取り組んだ。

以上、敷衍した学問上の危機は、学校政治上の危機と不可分であった。なぜなら歴史学的で実証主義的な学問としての古典文献学が古代ギリシアの最高の規範性を問いに付したのであれば、学校で教鞭を執る人文主義者は自らの教授対象が教育的な価値を持つことに十全の自信を持つわけにはゆかなかったからである。しかしヴィラモーヴィッツ＝メレンドルフのような指導的な古典文献学者は、学校が政治上の危機にあることに強い関心を持たなかった。彼にとっては、彼自身が取り組む古典文献学という学問の進歩の方が、教養施設としての人文主義ギムナジウムの退潮よりも気にかかっていたからである³⁸⁾。かくして人文主義においては、学校政治上のディスクルスと学問上のディスクルスが分離する危険に瀕していた。人文主義ギムナジウムと古典文献学は第一次世界大戦後、共に公の信望の低下に苦しまざるを得なかったにもかかわらず。

Ⅲ. 社会政治上の危機

第一次世界大戦は11月革命とドイツの敗北によって終わった。大多数の人文主義者が支持した君

36) ニーチェ『悲劇の誕生』第10章、第15章、第18章、遺稿の「我ら文献学者」等を参照。

37) s. Der Streit um Nietzsches >Die Geburt der Tragödie aus dem Geiste der Musik<, Die Schriften von E. Rohde, R. Wagner, U. v. Wilamowitz-Moellendorff, zusammengestellt und eingeleitet v. Karlfried Gründer, Hildesheim 1969.

38) Wilamowitz-Moellendorff, Ulrich von: Philologie und Schulreform. Festrede im Namen der Georg-August-Universität zur Akademischen Preisverteilung am 1. Juni 1892, in: Reden und Vorträge, Berlin/Göttingen ³1913, S.104f..

主政は瓦解し、新しい、民主主義的なヴァイマル共和国が成立した。戦勝国によってドイツへ要求された巨額の賠償金とフランスによるルール地方の占領によって生じた天文学的なインフレは、深刻な打撃を特に中産市民階級に与えた。中産市民階級の多くは物質的な困窮に陥り、貧困化した。小政党が議会で争い合い、比較的長い期間、政権の座にあった政府は稀にしか成立しなかった。左派と同様、右派によるテロが起き、政治的な反乱の試みが幾度か企てられた。1929年の世界経済恐慌の後、失業者の数が急激に増え、少なからぬ人は古い官憲国家の君主政へ回帰するか、(共産主義あるいはナチズムに基づく)新たな政治秩序を建設することに憧れた。ドイツ人の多くは、ヴァイマル共和国は維持するに値しないという考えへと誘惑された。こうして1920年代のドイツは周知のように政治的、社会的に不穏な情勢に満たされていた。

IV. 文化上の危機

野蛮な様相を呈した第一次世界大戦は、ヨーロッパ文明の進歩への信仰を揺るがした。「人間性 Humanität」のような市民文化の理想像は、信憑性を失った。ヴァイマル共和国の時代、伝統的な価値の空隙を満たすべく、意味を創設する多くの提供物が生まれた³⁹⁾。それには秘教的な方向から民族的、コスモポリタンの方向に至るまで、様々なタイプがあった。少なからぬ人はキリスト教や人文主義といったヨーロッパの伝統的な価値への関心を失った。しかし他方、かかる精神的な伝統の本質を考え抜こうとした人もいた。文化的な危機感、オスヴァルト・シュペングラー (Oswald Spengler) 『西洋の没落 世界史の形態学の素描』⁴⁰⁾ (以下『西洋の没落』と略) の中に集中的に表現された。彼はヨーロッパ文明の他文化に対する優位を相対化したのみならず、自らの生物学的・形態学的なモデルにしたがってヨーロッパ文明が不可避免的に没落するとの予言を下した。この『西洋の没落』はセンセーションを巻き起こし、第一次世界大戦後のドイツで多くの読者を見出した。ところでシュペランガーは「文化理解を目的とする学科」に表れた「人間と文化の精神的な存在を真に照明する心理学への憧れ」を、『西洋の没落』が大きな影響を及ぼした一因と見なした⁴¹⁾。

以上で触れた I～IV が 4 種の危機の内容である。学校政治上、学問上の危機は、社会政治上、文化上の危機が明らかとなった後、一般にアクチュアルなものとなった。なぜならその時、初めて明瞭に、学校政治上、学問上の危機が社会政治上、文化上の危機の根源として自覚されたからである。

39) これについてイエーガーは、批判的に述べている。Jaeger, Werner: Stellung und Aufgaben der Universität in der Gegenwart, in: Reden und Vorträge, a.a.O., S.83f..

40) Spengler, Oswald: Der Untergang des Abendlandes. Umriss einer Morphologie der Weltgeschichte, München 1918.

41) Spranger, E. : Zum kulturkundlichen Unterrichtsprinzip, a.a.O., S.753.

第3節 危機を克服する試みとしての、イエガーの「第三の人文主義」

本節においてはイエガーが前節で触れた危機にどのように対応したか明らかにすることによって、彼の「第三の人文主義」の内容それ自体に触れてみたい。

イエガーはアリストテレスの『形而上学』成立史研究を通して示したように、修業時代すでに古典文献学における歴史学的一批判的な方法に熟達していた。彼はバーゼル大学への就任演説「文献学と歴史学」において前節のⅡで触れた古典文献学という学問の危機と取り組み、古典文献学と歴史学という2つの学問の相違を精密にすることを試みた。すなわち彼によれば、文献学者は「理解Verstehen」、歴史学者は「認識Erkennen」を目指す。その際、前者の理解は価値と関係し、後者の認識は因果関係的で時代的な事実の関連を明らかにするという。そしてイエガーは、歴史学に古典的な歴史学は存在せず、古典的な古代学は古典文献学にのみ存在することを主張した⁴²⁾。

第一次世界大戦中イエガーは健康上の理由から兵役を免除され、戦場で戦った経験がなかった⁴³⁾。しかし彼は11月革命をキールで経験した⁴⁴⁾。イエガーはドイツ敗戦の前年（1917年）、時代や社会の状況に関する深い不安感を彼の師匠であるヴィラモーヴィッツ＝メレンドルフに書簡で伝えている⁴⁵⁾。イエガーは他の同時代人と同様、社会政治上の危機を我が身に感じていたのである。

以下、彼がベルリン時代、人文主義的な教養のために構想し、企てたことを、4つの点から考察する。つまりⅠ．後継者養成のための叢書、学際的な雑誌の創刊、学術協会の設立、Ⅱ．通俗学問面・啓蒙面での貢献、Ⅲ．専門家による学術会議の開催、Ⅳ．『パイディア』の執筆である。

Ⅰ．後継者養成のための叢書、学際的な雑誌の創刊、学術協会の設立

イエガーはベルリン大学へ赴任した後、後継者を養成するため1925/26年から『新しい文献学的な探究』という叢書を刊行した。この叢書には彼の弟子による博士論文や教授資格請求論文が収録され、ヴィラモーヴィッツ＝メレンドルフが同様の目的で刊行した『文献学的な探究』を継承するものであった。さらにイエガーは1920年代、2つの学際的な雑誌を創刊している。第一に、『古代 古典古代の芸術と文化のための雑誌』⁴⁶⁾（以下『古代』と略）の創刊が挙げられる（1925年）。

42) Jaeger, Werner: Philologie und Historie, in: Humanistische Reden und Vorträge, a.a.O., S.10. s. Jaeger, Werner: Humanismus und Jugendbildung, in: a.a.O., S.64.

43) Mensching, E.: a.a.O., S.104.

44) Mensching, Eckart: Über Werner Jaeger (geb. am 30. Juli 1888) und seinen Weg nach Berlin, in: Nugae zur Philologie-Geschichte, Bd. II, Über Ed. Norden, F. Jacoby, W. Jaeger, R. Pfeiffer, G. Rhode u.a.. Mit einem Text von Werner Jaeger, Berlin 1989, S.61.

45) Ulrich v. Wilamowitz-Moellendorf. Selected Correspondence 1869-1931, hrsg. v. William M. Calder III, Antiqua 23, 1983, S.178.

46) Die Antike. Zeitschrift für Kunst und Kultur des Klassischen Altertums. 年刊誌。写真が要所で挿入され、堅牢

この雑誌は古典文献学者のみならず、芸術史家、考古学者、古代に関心を抱く詩人を読者、執筆者の対象とした。著名な詩人による寄稿者の例として、フーゴー・フォン・ホフマンスタール (Hugo von Hoffmannstahl)、ルドルフ・ボルヒャルト (Rudolf Borchardt) が挙げられる。第二に、同じ1925年、書評誌である『グノーモン』⁴⁷⁾ (古代ギリシア語で批評家の意) が創刊された。同誌は古典的な古代学と関わる様々な学問分野、その近代の教育と教養への影響に関わる新刊書の書評を行った。『古代』との関連で、1924年には「古代文化協会」を設立された (『古代』は同協会の会員へ配布され、同協会のいわば協会誌となった)。同協会は「現在の精神生活のために古代文化の学問的な認識を豊かにする」⁴⁸⁾ ことを謳い、学者のみならず「全ドイツ語圏の教養世界」⁴⁹⁾ から会員を募った。「古代文化協会」第2代の会長を務めたのはヨハネス・ポピッツ (Johannes Popitz) である。彼は当時、ドイツ財務省の次官 (1933年からはプロイセンの蔵相) で、会長職を1929年から1944年まで務めた。

『古代』『グノーモン』のような学際的な雑誌の創刊、「古代文化協会」のような学術協会の創設は、ギリシア・ローマ古典古代の愛好者の緩い結び付きを自覚的に培うことを通して、周辺的な存在となりつつあった教養市民のまとまりを再建する試みとして解釈できるであろう。

II. 通俗学問面・啓蒙面での貢献

イエーガーはギリシア・ローマ古典古代の同好者の比較的閉じた集まりを再編するのみならず、ギリシア・ローマ古典古代が近代人の生活に対して持つ意義を、広範囲の公衆に伝えることを試みた。彼は1920年代と1930年代、ドイツの様々なギムナジウムや大学等で異なる公衆を前にして、人文主義的な教養の重要性に関する講演を文書で確認できる限り計9回、開いている⁵⁰⁾。かかる講演の中で彼はしばしば同時代の教育制度や文化、社会的・政治的な現象についても言及しており、当

な装丁で、高級誌の印象を与える。同誌は驚くべく広い公衆の手に達したという (Mensing, E.: Über Werner Jaeger im Berlin der zwanziger Jahre [Schluß], a.a.O., S.99)。『古代』は1945年以後、東ドイツにおいては Das Altertum、西ドイツにおいては Antike und Abendland. Beiträge zum Verständnis der Griechen und Römer und ihres Nachlebens へと引き継がれた (後者は今日に至る)。

47) Gnomon. Kritische Zeitschrift für die gesamte klassische Altertumswissenschaft. 年に8回刊行。イエーガーの弟子リヒャルト・ハーダー (Richard Harder) が初代の編集長を務め、今日に至る。

48) Jaeger, Werner: Einführung, in: Die Antike, a.a.O., Bd.1, Berlin/Leipzig 1925, S.1.

49) A.a.O..

50) Schadewaldt, Wolfgang: Gedenrede auf Werner Jaeger 1888-1961, Berlin 1963, S.27-31.

時の彼の講演から彼の反近代主義的⁵¹⁾、反共産主義的⁵²⁾、ヨーロッパ的かつ反国際主義的⁵³⁾、伝統主義的⁵⁴⁾な立場を読み取ることができる。さらにイエガーは1920年代の後期、保守右派の刊行した「ドイツ一般新聞Deutsche Allgemeine Zeitung」に、人文主義に関する4つの記事を発表した⁵⁵⁾。

Ⅲ. 専門家による学術会議の開催

上で述べたⅠとⅡの側面は、「第三の人文主義」の組織および普及と関係していた。しかし「第三の人文主義」は内容的に新しい方向付けを必要としており、それは以下の専門家の会議で議論され、イエガーの『パイデイアー』において集約的に表現されるに至った。

1930年、古典古代と関わる学問の専門家による学術会議がイエガーの主唱の下、ナウムブルクにおいて開催された。本会議のテーマは、「古典的なものという問題と古代」であった⁵⁶⁾。古典古代と関わる様々な分野出身の8人の発表者が、自らの学科—ギリシア学、ラテン学、哲学、歴史学その他—の立場から、このテーマについて講演を行った。ここでイエガーがなぜ本会議において、「古典的なものという問題と古代」をテーマとして設定したのか、考えてみたい。第2章第2節Ⅱ「学問上の危機」において、古典文献学の内部における歴史学的、実証主義的な研究方向が19世紀を通して、ギリシア・ローマ古典古代の規範的な古典性を掘り崩しつつあったことに触れた⁵⁷⁾。これによって「古典的なもの」という概念は相対化され、時と共に不明瞭なものとなり、外へ働きかける力を失ってしまった⁵⁸⁾。かかる時代的、学問史的な背景の下でイエガーは、「古典的なもの」という概念について改めて議論を試みたように見える。討議を経て新たに獲得された「古典的なもの」

51)「映画館、ラジオ、顕微鏡」「大資本」「文化と学問の機械化」に対する批判 (Jaeger, Werner: Die geistige Gegenwart der Antike, in: Reden und Vorträge, a.a.O., S.166) 等。s. a.a.O., S.172.

52)「モスクワ」への批判 (A.a.O., S.166.)、「東方の力に対する安易な精神的な降伏」への警告 (Jaeger, Werner: Die Antike im wissenschaftlichen Austausch der Nationen, in: Reden und Vorträge, a.a.O., S.185) 等。

53)「国際連盟」に対する批判 (Jaeger, W.: Die geistige Gegenwart der Antike, a.a.O., S.166) 等。

54)「あらゆる伝統との途方もない断絶」に対する批判 (A.a.O.) 等。

55) Schadewaldt, W.: a.a.O., S.29-31.

56) Das Problem des Klassischen und die Antike. Acht Vorträge der Fachtagung der klassischen Altertumswissenschaft zu Naumburg 1930, hrsg. v. Werner Jaeger (1933), Darmstadt²1961.

57) イエガー自身、この側面に言及している。Jaeger, Werner: Platos Stellung im Aufbau der griechischen Bildung, in: Humanistische Reden und Vorträge, a.a.O., S.117f..

58) イエガーの師匠であるヴィラモーヴィッツ＝メレンドルフは、「統一と理想としての古代は消えた。学問それ自体がこの信仰を壊したのだ」(Wilamowitz-Moellendorff, U. v.: Der griechische Unterricht auf dem Gymnasium, a.a.O., S.79)、「古代は絶対的な模範性をはるか以前に失ってしまった」(Wilamowitz-Moellendorff, Ulrich von: Die Geltung des klassischen Altertums im Wandel der Zeiten [1921], in: Kleine Schriften, Bd. VI, a.a.O., S.150) と語っていた。これに対してイエガーは、自らの携わる学問を取って「古典的な古代学 klassische Altertumswissenschaft」と名付けた。

という概念は、「第三の人文主義」に確固たる支えを提供すべきであった。

このナウムブルクで開かれた専門家の学術会議によって、「古典的なもの」というテーマは人文主義にとって焦眉の問題として認識された。同会議の後、ドイツ古典文献学者協会は同じ1930年、『ドイツの人文主義ギムナジウムのための古典語教授計画』（以下『教授計画』と略）を発表した（イエーガーは1925年の同協会の創立後、副会長）。ドイツ古典文献学者協会は、第2章第2節で触れた学校教育上と学問上のディスクルスの架橋を目指し、大学における古典研究、学校における古典語教育の専門家を主たる会員とした。同協会の努力は短期間の裡に実り、1928年には「古典文献学におけるほど、大学と学校の教師が共に属する場はない」⁵⁹⁾ことが語られていた。同協会の刊行物『報告Mitteilungen』等は、時と共に「第三の人文主義」の代弁者となっていたのである⁶⁰⁾。さて上で触れた『教授計画』からの一節を以下、引用する。「人文主義ギムナジウムは（中略）あらゆる授業科目に対して固有の教育目標を持ち、この目標はヨーロッパ文化の歴史的・超歴史的な形式と構築の原理としての人文主義の理念に基づいている」⁶¹⁾。「古典時代のギリシア人とローマ人にとって人間は共同体の一員としての存在であったので、彼らの作品との取り組みは、個々人を共同体、特に国家と民族の共同体へと組み入れるのに貢献するであろう」⁶²⁾。「教育的な意味における古代の作品の古典的な価値が生きて働くのは、a) 古代の文学作品がその本性上—たとえこの作品において哲学的、歴史的、学問的な著作が問題となっても—、芸術的な形成物であり、b) 古代人の下における偉大な文学作品の創造者が常に同時に自民族の教育者であるという二点を、作品の解釈を通して認識する場合に限られる。（中略）パイデイアーという思想が人文主義の考察にとって決定的であり、この思想を気の抜けた道徳的なものとする事は許されない。この思想は、むしろ人間的なものの模範的な形成による人間形成という意味において力を発揮するのである」⁶³⁾。こうして古

59) Abernethy, Walther: Was ist heute der Deutsche Philologenverband, und welche Aufgaben hat er in der nächsten Zeit zu füllen? in: Mitteilungen des Deutschen Altphilologen-Verbandes, Bd.2, 1928, S.2. s. Preuß., U. : a.a.O., S.142. イェーガーはパーゼル大学への就任演説において、「古典的な古代についての学問は、特に学校と大学を通して教養ある層へと影響を及ぼし、かかる基本財産を、自らの働きかけのきわめて価値ある証として持ちます」(Jaeger, W. : Philologie und Historie, a.a.O., S.15)と語っていた。近年におけるイエーガーに対する再評価はこうした面に対しても向けられている。s. Fritsch, Andreas: Ein kritischer Rückblick auf den Dritten Humanismus in der ersten Hälfte des 20. Jahrhunderts, in: Humanismus und Menschenbildung. Zur Geschichte, Gegenwart und Zukunft der bildenden Begegnung der Europäer mit der Kultur der Griechen und Römer, hrsg. v. Erhard Wiesing, Essen 2001, S.230f..

60) Fritsch, A. : Ein kritischer Rückblick auf den Dritten Humanismus in der ersten Hälfte des 20. Jahrhunderts, a.a.O., S.238.

61) Altsprachlicher Lehrplan für das Deutsche humanistische Gymnasium, vorgelegt vom Deutschen Altphilologen-Verband, Berlin 1930, S.3.

62) A.a.O., S.6.

63) A.a.O., S.12.

代ギリシア人の（政治的な）教育者としてのあり方が、新たな古典性として大きな注目を惹くに至った⁶⁴⁾。

IV. 『パイデアー』の執筆

イエガーは新しい、「第三の人文主義」についての構想を自らの講演の中で時折、述べていた。しかしそれは、まとまった形においてはなかった。彼のいやまず権威と名声を背景⁶⁵⁾として、彼の主著『パイデアー』が成立した。この作品においては、イエガーによる古代ギリシア人のあり方の本質についての見解が集約的に表現されており、それは注61～63で引用した『教授計画』における古典古代像を詳しく敷衍した内容となっている。

同書の序文で、イエガーは同書の課題を、「ギリシア人の教養、つまりパイデアーを、その無比の固有性と歴史的な展開の中で描き出す」⁶⁶⁾ 中に見ている。このパイデアーは、イエガーによれば、古代ギリシア人の文学的、哲学的、医学的、政治的な著作の中に証言されているという。彼は古代ギリシアにおける教育思想の展開をホメロスからデーモステネースに至るまで、ほぼ時代順に追い、その際、この教育思想と社会政治的な環境との相互関係についても述べている。私見では『パイデアー』は、3つの軸からなる。以下、個々の軸に触れることにする。

1. 古代ギリシア人の無比のあり方

イエガーは古代ギリシア語の「パイデアー」を「文化Kultur」や「教養Bildung」というドイツ語とほぼ同一視し⁶⁷⁾、古代ギリシアにおけるように純粋な人間形成という考えに基づく文化は、他の文化圏において生まれなかったという⁶⁸⁾。すなわち古代ギリシア人のみが、「人間の生と、それによって人間の身体的・霊的な力が活動する内在的な法則についての明晰な意識を得た」⁶⁹⁾ という。イエガーはかかる特徴付けによって古代ギリシア文化の他文化に対する優位を基礎づけた。

2. 古代ギリシア人のあり方に基づく文化的、歴史的な統一体としてのヨーロッパ

イエガーは読者に、古代ギリシア人のあり方はドイツ・ヨーロッパ人にとって過去の偉大さのみならず、むしろ生きた偉大さであることに注意を喚起する。なぜなら古代ギリシア人のあり

64) ナウムブルクでの学術会議にはるか先立つ1921年、イエガーはすでにこうした見解を述べていた。Jaeger, W. : Humanismus und Jugendbildung, a.a.O., S.44.

65) s. Gadamer, Hans Georg: Philosophische Lehrjahre. Eine Rückschau, Frankfurt am Main 1977, S.48.

66) Jaeger, Werner: Vorwort, in: Paideia. Die Formung des griechischen Menschen, Bd.1, Berlin/Leipzig²1936.

67) A.a.O., S.6, 12.

68) A.a.O., S.8. 同じ考えはすでに以下の講演で表現されている。Jaeger, W. : Antike und Humanismus, a.a.O., S.108.
s. Jaeger, W. : Platos Stellung im Aufbau der griechischen Bildung, a.a.O., S.120.

69) Jaeger, W. : Paideia, a.a.O., S.12.

方は、人文主義の伝統によって現代に至るまで連続的に継受されてきたからである⁷⁰⁾。彼は『パイデイア』執筆以前に開いた講演で、古代ギリシア人のあり方はヨーロッパ文化の「作用因^{causa movens}」⁷¹⁾、「^エンテレケ^イア^ア」⁷²⁾である、と述べている。イエーガーによれば、この貴重な文化財産を育み、生産的に我が物とし、後世へと伝えることこそ、ヨーロッパ諸民族の結び付きを形成する⁷³⁾。ところでヨーロッパの精神的伝統としてはギリシア・ローマ古典古代のみならずキリスト教が挙げられ、両者はしばしば対立的に捉えられてきた。しかしイエーガーは古代ギリシア思想(特にプラトーン哲学)をキリスト教神学の必然的な前段階と見なし、両者の連続性を主張したのである⁷⁴⁾。

3. 教育の目的としての政治的な人間

アリストテレスによれば、人間は古代ギリシア語で^{zoon politikon}、すなわち「国家という形式の中で生きる生き物」⁷⁵⁾である。イエーガーはこうした人間像に依拠し、古代ギリシア人の生は国家や共同体から切り離し得なかったと推論する。その際に国家は、常に個人よりも優位にあったという⁷⁶⁾。この主張をイエーガーはプラトーンの状態哲学によって基礎付ける。古代ギリシア人はかかる前提の下に政治的に教育されたという⁷⁷⁾。こうした政治的教養としての教養は、新人文主義における個人的、美的な教養としての教養と対立的に理解されている⁷⁸⁾。イエーガーはこの政治的教養を、「古代ギリシアとドイツとの親縁性」という伝統的なテーゼに依拠することにより、国民教育学のため活性化しようと試みる⁷⁹⁾。すなわち彼は、古代と現代における2つの敗戦国の運命を類比的に捉える。2つの敗戦国とは、ペロポネネーソス戦争の末期30人僭主が支配し、ソフィストが活動し、同戦争の敗北後ソークラテースが民主主義者によって処刑されたアテナイと、20世紀

70) A.a.O., S.5f., 9. この考えは以下の講演においてより明確に表現されている。Jaeger, W.: Antike und Humanismus, a.a.O., S.111f. Jaeger, W.: Platos Stellung im Aufbau der griechischen Bildung, a.a.O., S.126.

71) Jaeger, W.: Humanismus und Jugendbildung, a.a.O., S.44. s. Jaeger, W.: Platos Stellung im Aufbau der griechischen Bildung, a.a.O..

72) Jaeger, W.: Antike und Humanismus, a.a.O., S.105.

73) Jaeger, Werner: Der Humanismus als Tradition und Erlebnis, in: Humanistische Reden und Vorträge, a.a.O., S.30. s. Jaeger, W.: Die Antike im wissenschaftlichen Austausch der Nationen, a.a.O., S.184f..

74) この主張は『パイデイア』においては、「万物の基準は人間である」(ソフィストのプロタゴラス)から「万物の基準は神である」(プラトーン『法律』)への転回として描かれている。

75) アリストテレス『政治学』1253a3. ドイツ語の翻訳については、Jaeger, Werner: Die griechische Staatsethik im Zeitalter des Plato, in: Humanistische Reden und Vorträge, a.a.O., S.89.

76) Jaeger, W.: Paideia, a.a.O., S.16. s. Jaeger, W.: Die griechische Staatsethik im Zeitalter des Plato, a.a.O., S.98f..

77) Jaeger, W.: Paideia, a.a.O..

78) Jaeger, W.: Paideia, a.a.O., S.16f.. s. Jaeger, W.: Die Erziehung des politischen Menschen und die Antike, a.a.O., S.44.

79) Jaeger, W.: Paideia, a.a.O., S.36, 88.

初期の文化的な混迷状態から第一次世界大戦での敗北を経てヴァイマル共和国の民主政に至るドイツのことである⁸⁰⁾。両敗戦国の社会政治的な状態—特に個人主義の跋扈、国家の弱体化—は、イエガーによって批判的に明らかにされる⁸¹⁾。それゆえ彼による政治的な教養とは既存のヴァイマル共和政の国家秩序の維持を目指すものではなく、むしろ古い官憲国家の君主政への回帰、ないしは（ナチズムに基づく）新たな政治秩序への志向を孕んだ。こうして彼は古代ギリシアにおける政治的なものを強調することによって、同時代のドイツへ直接的に働きかけることを標榜した。

以上 I～IV が、イエガーによる「第三の人文主義」の内容である。学問上の危機を背景として開催されたナウムブルクでの専門家の学術会議において、古代ギリシア人のあり方の新たな古典性を模索する必要性が認識され、それは教育的なものの中に見出された。この新たな古典性を支えるパイデア（教育）という概念は、学校政治および学問というそれぞれの分野の危機の克服に、共に寄与するように見えた。イエガーは古代ギリシア人のあり方の最高の規範性とそれに基づくヨーロッパ文化の統一性を説き、これは同時代における（古典古代という規範の）相対化を促す二つの傾向に対抗するものとして考えられていた。つまり第一には、学校政治における人文主義への直接の脅威、すなわち「文化理解を目的とする学科」⁸²⁾ に対して、第二には、文化上の危機の内容をなした、シュペングラーによるヨーロッパの格下げ⁸³⁾ に対してである。さらにイエガーによる、教育の目標としての政治的な人間という構想は、学校における古典語授業への批判—人文主義ギムナジウムは問題解決に寄与しない人物を作り出す—を骨抜きにするだけではなく、ヴァイマル共和国における社会政治上の危機の克服に貢献すべきであった。学際的な雑誌と学術的な協会の創立、通俗学問面、啓蒙面における寄与においては、人文主義的な教養の担い手を結び付けるのみならず、その担い手の輪を社会の中で増やすことが期待されたと思われる。

80) これを示唆するものとして、Jaeger, W.: *Paideia*, a.a.O., S.423f., 464, 477. s. Jaeger, Werner: *Staat und Kultur*, in: *Humanistische Reden und Vorträge*, a.a.O., S.197-202. Stiewe, B.: a.a.O., S.235.

81) 例えば Jaeger, W.: *Paideia*, a.a.O., S.378. s. Jaeger, Werner: *Die griechische Staatsethik im Zeitalter des Plato*, a.a.O., S.91-95.

82) Jaeger, W.: *Die Erziehung des politischen Menschen und die Antike*, a.a.O., S.49. イエガーと教育学上、近い立場にあったシュペランガーは、「文化理解を目的とする学科」を「百科全書主義」の名の下に批判している (Spranger, E.: *Zum kulturkundlichen Unterrichtsprinzip*, a.a.O., S.758)。1820 年代から 40 年代にかけてのドイツにおいては人文主義の古典語教育をめぐる「百科全書主義」と「古典主義」の対立があり、前者は様々な学科の教授、後者は古典語を中心とした学科編成を唱えた。この 19 世紀前半の対立と類似した対立が 1920 年代、生れたのは興味深い。「百科全書主義」と「古典主義」の対立について詳しくは、前掲、『人文主義と国民形成』pp.168-175 を参照。

83) 「シュペングラーの歴史哲学という邪説」(Jaeger, W.: *Der Humanismus als Tradition und Erlebnis*, a.a.O., S.26) 「西洋の没落という流行の理論」(Jaeger, W.: *Antike und Humanismus*, a.a.O., S.104.) s. Jaeger, W.: *Platos Stellung im Aufbau der griechischen Bildung*, a.a.O., S.117.

第3章 「第三の人文主義」の根源

「第三の人文主義」は過去の様々な伝統に根付いていた。こうした様々な過去の伝統の中から3つの伝統、つまり新人文主義、ニーチェ、「国民保守主義Nationalkonservatismus」を取り上げ、これらの伝統と「第三の人文主義」との関わりを本章においては詳らかにしたい。

第1節 新人文主義

「第三の人文主義」が新人文主義と幾つかの共通点を持っていたことは、一方で紛れもない事実である。すなわちヴィンケルマンやゲーテのような新人文主義者は、後にイエーガー自身が主張したように、すでに古代ギリシア人のあり方に無比の高い価値を付与していた。ヴォルフもイエーガーに先んじて、古代ギリシア文化は他文化に対して絶対的な優位を占めると主張した⁸⁴⁾。「古代ギリシアとドイツとの親縁性」というテーゼも、同様に新人文主義に遡る。ただし「第三の人文主義」においてこの2つの国民性の類似は、新人文主義におけるように言語、国民性、精神⁸⁵⁾のみならず、「人種Rasse」や「種Art」⁸⁶⁾の中に求められることがあった。

他方でイエーガーは新人文主義を、それが政治的教養ではなく、美的で個人的な教養を目的としたとして批判した⁸⁷⁾。実際、個人が国家よりも優位を占める新人文主義の個人的教養と、国家から出立する「第三の人文主義」の政治的教養との間には、対立関係があるように思える。しかし以下、イエーガーによる新人文主義の美的で個人的な教養を非政治的と見なす理解には、異論の余地があることを指摘したい。確かにイエーガーがいうように、新人文主義者の著作の中にはシラーとゲーテの「クセーニエン」における一節「君たちドイツ人よ、ネイションを形成しようとしても無駄なことだ。その代わりに、自らをより自由に人間へと形成したまえ」⁸⁸⁾に表れているように、政治的な国民形成と個人的教養とを相容れない、二者択一的なものとして捉え、後者を重視する見方が存在する。しかし同じく新人文主義者のヴィルヘルム・フォン・フンボルト (Wilhelm von Humboldt) は、「(古典語教育の形式陶冶を通して最も自由に) 形成された人間は、国家に入り込み、国家の憲法をさながら国家に即して吟味しなければならないだろう。そのような戦いにおいてのみ、

84) Wolf, Friedrich August: Vorlesungen über die Altertumswissenschaft, hrsg. v. J. D. Gürtler, Leipzig 1831-1839, Bd.1, S.15.

85) 前掲、『人文主義と国民形成』pp.109-110.

86) Jaeger, W. : Paideia, a.a.O., S.88.

87) A.a.O., S.15f..

88) Goethe, Johann Wolfgang von: Deutschland, in: Xenien, in: Gedichte 1756-1799, Bd. I /1, hrsg. v. Karl Eibl, in: Sämtliche Werke. Briefe, Tagebücher und Gespräche, Frankfurt am Main 1987, S.507.

私はネイションによる憲法の真実の改善を確実に期待したと思う」⁸⁹⁾と記している⁹⁰⁾。W. v. フンボルトの場合、個人的教養から国家の政治への関与が連続的に捉えられ、この「国家の政治への関与」はイエガーが目指した政治的教養の目的と近かったと思われる。するとイエガーは、元来、新人文主義の個人的教養に孕まれていながらも、彼の同時代にはその働きかけが弱まっていた国家の政治への関与という側面を、「第三の人文主義」の新たな政治的教養という形で活性化しようと試みたといえないだろうか。イエガーは自らの「第三の人文主義」の独自性を強調するよう迫られ、これと新人文主義との差異化を図るため、敢えて新人文主義の美的で個人的な教養を非政治的と見なし、これを批判した、といえるかもしれない。これとの関連で、彼が新人文主義以来、人間の「教養・形成」を表す言葉として人口に膾炙していたBildungという概念を避け、代わりにFormungという概念を『パイデイアー』の副題である「ギリシア人の人間形成」の「形成」を表す言葉として用いたことは示唆的である。もっともこのFormungという概念は、新人文主義の「形式陶冶formale Bildung」という表現に含まれていた言葉でもあったわけだが。

以上をまとめると、新人文主義の3つの重要な特徴である、古代ギリシア人のあり方の最高の古典性、「古代ギリシアとドイツとの親縁性」、「形式陶冶」は、そのまま、ないしは多かれ少なかれ解釈の変化を伴いつつも、イエガーの「第三の人文主義」によって受容されたとと言えるであろう。ただし新人文主義がその影響下にあった自由主義から社会民主主義、ヴァイマル共和国の民主政に至る流れと、イエガーが属した国民保守主義（後述）の流れとの間に対立があったことを見逃してはならない。

第2節 ニーチェ

ニーチェが「歴史主義の危機」を問題化する際、先駆的な役割を果たしたことにすでに言及した。イエガーは古典文献学における歴史学的、実証主義的な研究の問題に触れる際、ニーチェを自らの先達として仰いでいる⁹¹⁾。これによってイエガーは余人に先駆けて、歴史主義に対する先駆的な批判者としてニーチェの名誉を古典文献学者の下で回復することに貢献した⁹²⁾。ニーチェは、彼

89) Humboldt, Wilhelm von: Ideen zu einem Versuch, die Gränzen der Wirksamkeit des Staates zu bestimmen (1797), in: Werke, hrsg. v. Andreas Flitner u. Klaus Giel, Bd.1, Stuttgart 1981, S.106.

90) 「新人文主義は、この新しい人間を（既成の身分制）国家に対して、国家なしに、しかし結果として（新たな国民）国家のために構成した。なぜならこの新しい人間は市民であり、国家に参加することでこの国家を変えるからである」（Landfester, Manfred: Geistiger Wiederaufbau Deutschlands durch die humanistische Erinnerungskultur nach 1945, in: Gießener Universitätsblätter, Jg.33, 2000, S.78）。

91) Jaeger, W. : Der Humanismus als Tradition und Erlebnis, a.a.O., S.24, 26-28.

92) s. Landfester, M. : Die Naumburger Tagung. „Das Problem des Klassischen und die Antike“, a.a.O., S.18f.. Cancik, Hubert: Der Einfluß Friedrich Nietzsches auf klassische Philologen in Deutschland bis 1945. Philologen

を批判したヴィラモーヴィッツ＝メレンドルフがベルリン大学古典文献学科教授としてドイツ古典文献学界の重鎮となったこともあり、古典文献学者の間で長年、無視されてきたのである。

ニーチェとイエーガーは共に歴史学的、実証主義的な研究に対する批判を行ったが⁹³⁾、以下、両者の相違へ目を向けてみたい。それは両者が再建を試みた古代ギリシア文化観に関わる。つまりニーチェは古代ギリシアの音楽的で、生き生きとしていて、彼の表現では「ディオニューソスの」な側面に注目し、古代ギリシア人の前古典主義的な時代を理想化した⁹⁴⁾。これに対してイエーガーは、古代ギリシアの彫塑的で、知的で、再びニーチェの表現を用いれば「アポッロンの」な側面を高く評価し⁹⁵⁾、古代ギリシア人の古典主義的な時代を神聖視した。ニーチェとイエーガーの芸術観の相違は、彼らによるギリシア悲劇の捉え方の中に特にはっきりと表れている。すなわちニーチェは、ギリシア悲劇を純粹に美的で、非政治的な現象として考察し、その起源を抒情的で、音楽的な要素に帰そうと試みた⁹⁶⁾。他方イエーガーは、ギリシア悲劇を政治的なポリス共同体を顧慮して考察し⁹⁷⁾、アリストテレースと同様、悲劇が叙事詩の伝統から生まれたと考えた⁹⁸⁾。これによってイエーガーは、形式という理想およびアポッロンのな古代ギリシア像に基づく新人文主義へ密かに回帰しているように見える⁹⁹⁾。ところでニーチェによる、ロマン派の流れを汲むディオニューソス的な古代ギリシア像は彼の死後、イエーガーの時代に至るまで、ドイツ・ヨーロッパの芸術家に大きな魅力を放った。それはゲオルゲ・クライスおよびナチズムによるニーチェの受容が示すとおりである。しかしイエーガーは、かかる受容から距離を取ろうとしたのである¹⁰⁰⁾。

第3節 国民保守主義

国民保守派は「貴族、教養市民、財産市民の伝統的なエリート集団からなる人々」¹⁰¹⁾で、国民保守主義は「主に自らの国家の関心を代表する思考や行為、祖国や愛国主義と関わり（中略）、特に

am Nietzsche-Archiv (I), in: *Altertumswissenschaft in den 20er Jahren*, a.a.O., S.395.

93) イェーガーによる実証主義への批判は、以下を参照。Jaeger, W.: *Die Erziehung des politischen Menschen und die Antike*, a.a.O., S.44.

94) これについては、彼の『悲劇の誕生』において展開されている。

95) s. Jaeger, Werner: *Die geistige Gegenwart der Antike*, a.a.O., S.173.

96) ニーチェ『悲劇の誕生』第7～第8章。

97) Jaeger, W.: *Paideia*, a.a.O., S.307-363, 419-449, 474.

98) A.a.O., S.73, 244. アリストテレース『詩学』第4章を参照。

99) s. Jaeger, W.: *Humanismus und Jugendbildung*, a.a.O., S.49. Jaeger, W.: *Die geistige Gegenwart der Antike*, a.a.O., S.168. Jaeger, W.: *Paideia*, a.a.O., S.10f., 236.

100) Jaeger, W.: *Stellung und Aufgabe der Universität in der Gegenwart*, a.a.O., S.83. s. Groppe, Carola: *Die Macht der Bildung. Das deutsche Bürgertum und der George-Kreis 1890-1933*, Köln 2001, S.646-650.

101) Müller, Klaus-Jürgen: *Der nationalkonservative Widerstand 1933-1940*, in: *Der deutsche Widerstand 1933-1945*, Paderborn/München/Wien/Zürich 1990, S.40.

政治的な生において古きもの、昔から伝えられたもの、伝承されたものを固く保持し、(中略) 世代を通して伝承されてきた振舞いの仕方、理念、文化等を維持し、保存することに尽くす」記述的な概念と定義される¹⁰²⁾。国民保守主義はこの特徴によって、イエガーの政治的な立場と共通点を持つ¹⁰³⁾。ただしイエガーは人文主義者として国民的つまりドイツ的のみならずヨーロッパ的な心情を持っていたので、留保が必要だが。にもかかわらずイエガーの政治上の立場を、全体として国民保守的と名付けることが許されよう。

ここで三月革命後のドイツの人文主義者による、教養と政治の支配的な捉え方に再び目を向けてみたい。彼らの多くは政治的教養、つまり既存の国家秩序の維持を目的とする教養に依拠し、社会民主主義および共産主義に対して闘おうとした。20世紀の初期以来、学校で教鞭を執る人文主義者の下では、古典語の授業を政治的な公民教育に役立てようとする様々なコンセプトが展開した。ウーテ・プロイセ (Ute Preuße) は自らの著書の中で、教育の目的としての政治的な人間という「第三の人文主義」の構想が、20世紀初頭以来の古典語授業における公民教育の影響下に生まれたことを示した¹⁰⁴⁾。こうしてイエガーによる国民保守的な思考様式は、三月革命以降の人文主義者による、支配的な思考様式の影響下にあったと考えられる。

ドイツの国民保守派が反民主主義的、官憲国家的な思考によって、ナチスの権力掌握の土台を準備した一方、後にはナチスへの抵抗運動の一つの砦となったことが、しばしば指摘されてきた¹⁰⁵⁾。ナチズムへのかかる両義性は、イエガーの「第三の人文主義」の中にも表れている。すでに触れたように、彼はナチスの権力掌握を前にして、当初はナチズムへの接近を試みたが、後には彼らから距離を取った。それだけに留まらない。「古代文化協会」の第2代会長であったポーピツは、いわゆる「水晶の夜」事件の後、これに対する抗議からプロイセン蔵相の辞任願いを提出したが受理されず、後には国民保守的ないわゆるゲルデラー・グループでのナチスへの抵抗運動に加わった。この抵抗運動が瓦解した後、彼は逮捕、処刑された。ポーピツが逮捕された後、獄中でイエガーの『パイデИАー』第2巻を読んでいたことが伝えられている¹⁰⁶⁾。同巻の多くはプラトーンの家

102) Hammersen, Nicolai: Politisches Denken im deutschen Widerstand, ein Beitrag zur Wirkungsgeschichte neokonservativer Ideologien 1914-1944, Berlin 1993, S.40-42.

103) 注 51 ~ 54. s. Jaeger, W.: Staat und Kultur, a.a.O., S.201, 213.

104) Preuße, U.: a.a.O., S.176, 180f..

105) Müller, Klaus-Jürgen: Nationalkonservative Eliten zwischen Kooperation und Widerstand, in: Der Widerstand gegen den Nationalsozialismus. Die deutsche Gesellschaft und der Widerstand gegen Hitler, hrsg. v. Jürgen Schmäddeke u. Peter Steinbach, München/Zürich 1985, S.24.

106) Schulz, Gerhard: Johannes Popitz, in: 20. Juli. Portraits des Widerstands, hrsg. v. Rudolf Lill u. Heinrich Oberreuter, Düsseldorf/Wien 1984, S.242. これについての教示を、ギーセン大学歴史学科のアンネ・ナーゲル (Prof. Anne Nagel) 教授に感謝する。

哲学の説明に充てられている。ポーピツはプラトーンに私淑していた¹⁰⁷⁾。プラトーンによる批判的な国家概念¹⁰⁸⁾がポーピツの政治的な行動に影響を及ぼした確証はないが、その可能性は捨て切れない。

本章の最後に新人文主義、ニーチェ、国民保守主義と「第三の人文主義」との関わりを、19世紀初期以来の文化と政治の展開から整理する。「第三の人文主義」は、時と共に形骸しつつあった人文主義の伝統の再編を目指すものであり、新人文主義の乗り越えるべき点として文化的には（歴史的、実証主義的な研究の結果としての）古典性の空洞化、政治的には（美的で個人的な影響の結果としての、国家への）働きかけの無力が挙げられた。ニーチェは前者の文化的な危機と取り組み、歴史学的、実証主義的な研究を批判しつつ新たな古典性たるいわゆるディオニューソス的な古代ギリシア像を構想し、その影響はゲオルゲ・クライスを通して1920年代へ及んだ。他方、ドイツの政治的な国民形成は新人文主義の依拠した自由主義によってではなく保守派を中心として進行し、教養市民を含む国民保守派は政治への働きかけを国家秩序の新たな形成ではなく、既存の国家秩序の維持として理解するに至った。第一次世界大戦後のヴァイマル共和国における人文主義、ドイツ・ヨーロッパの文化・社会の危機に際してイエーガーは、ニーチェに依拠しつつ歴史学的、実証主義的な研究、その結果としての学問・学校政治上の混迷を批判した。その際、イエーガーが目指す文化の理解、内容は新人文主義のいわゆるアッポローン的な古代ギリシア像と共通点があった。他方、国民保守派によってヴァイマル共和国の民主政はあるべき国家秩序からの逸脱、国家への政治的な働きかけは民主主義への批判として主に理解され、イエーガーも自らの著作においてこれに与した。それゆえイエーガーによる新人文主義の受容はその教育・芸術観に及んでもその政治観（自由主義）の明示的な活性化に及ばず、ニーチェの受容は学問のあり方（歴史学的、実証主義的な研究）の批判に及んでも彼による新たな芸術観（ディオニューソス的な古代ギリシア像）に及ばなかった。これは19世紀後期から20世紀前期にかけての国民保守派に特有の態度であったといえよう。

結語

本論においてはイエーガーの経歴を紹介し（Ⅰ）。「第三の人文主義」の成立背景として4種の危機を考察した後、「第三の人文主義」の4つの側面を明らかにした（Ⅱ）。さらに「第三の人文主義」の3つの重要な根源を示し、それを詳しく検討することを試みた（Ⅲ）。

イエーガーの「第三の人文主義」は、潜在的には19世紀中期から、顕在的には第一次世界大戦の後、

107) A.a.O..

108) プラトーン『国家』第8巻第14章～第9巻第3章に僭主独裁制国家と僭主独裁制人間についての詳しい記述があり、この記述はナチス国家とヒトラーを連想させる。他方でプラトーンは、現実の国家と異なる、自己の内に神的な支配者を持つ「自己の内なる国制」の意義を強調した（プラトーン『国家』第9巻第13章）。

先鋭化した様々な危機への対応であった。主に学校での古典語授業と大学での古典文献学によって育まれてきた人文主義の伝統は、ドイツでは新人文主義の時代以降、国民意識の高揚と市民階級の台頭と密接に結びついていた¹⁰⁹⁾。しかし三月革命の後この伝統は、同時代の政治と同様、文化においても、創造的な力を失う危険に曝された。それは人文主義の伝統が、体制の庇護を受けることによったのである。人文主義に敵対する陣営からの批判のみならず人文主義の内的な展開¹¹⁰⁾も人文主義の伝統を、学校や大学、ひいては全社会においても周縁的な存在へと強いるように見えた。

イエガーの「第三の人文主義」は、自らに先行し、互いに対立し合ったニーチェおよびヴィラモヴィッツ＝メレンドルフの人文主義観をいわば換骨奪胎し、困窮から徳を作り出す試みであったように見える。それは部分的には失敗し、部分的には成功した。人文主義は第二次世界大戦後のドイツにおいて、大きな流れとして脱国民主義化され、脱政治化された¹¹¹⁾。これは、イエガーが期待したことの対極であった。しかしイエガーによる、ヨーロッパ文化の「完成された現実性」としての古代ギリシアという構想¹¹²⁾は、彼の弟子によって発展させられ、人口に膾炙した¹¹³⁾。

トーマス・マン (Thomas Mann) は他の人文主義者と同様、自らが「人間性」に義務を負うと感じていた。彼は1920年代の後期、ヴァイマル共和国が信憑性をますます失い、他方でナチスが台頭するのを前にして、自らの講演の中でしばしば、ドイツ・ロマン主義の刻印を継承した文化的な急進主義はナチズムの土台よりも、むしろ政治的な自由主義の土台において栄えるべきことを強調した¹¹⁴⁾。その際に彼は、ドイツにおいて政治と文化が伝統的に分離した領域として捉えられてきた

109) 前掲、『人文主義と国民形成』第2部を参照。

110) 当時の古典語授業は、しばしば無意味で機械的な訓練へと墮落する危険に曝されていたことが記録されている (Landfester, M.: Humanismus und Gesellschaft, a.a.O., S.173-175)。

111) Landfester, M.: Geistiger Wiederaufbau Deutschlands durch die humanistische Erinnerungskultur nach 1945, a.a.O., S.81f..

112) 注 72 を参照。

113) イエガーの弟子で、西ドイツにおける代表的な古典文献学者となったヴォルフガング・シャーデヴァルトは、イエガーの思想から完成された現実性の重要性を特筆し (Schadewaldt, W.: Gedenkrede auf Werner Jaeger 1888-1961, a.a.O., S.13)、「ヨーロッパの完成された現実性、生きて形成された根本形式としてのギリシア人のあり方」(Schadewaldt, Wolfgang: Heimweh nach Hellas heute?, in: Hellas und Hesperien, Bd.2, Zürich/Stuttgart 1970, S.445) を説いた。イエガーが『パイデアー』その他で主張した「ヨーロッパ Abendland」の再生、それを基礎付けるものとして (反共産主義を背景に) 人文主義とキリスト教を連続的なものとして捉える見方は、第二次世界大戦後の西ドイツにおいてアクチュアルなものとなった。こうした背景の下、西ドイツの古典語教育・古典研究は1972年まで一定の高いステイタスを獲得した。これをイエガーと彼の「第三の人文主義」に帰す見解については、注5を参照。この見解に依拠すれば、イエガーと彼の「第三の人文主義」はナチズムへの接近の試みという現実政治的な失敗にもかかわらず、長い意味で学校政治上の成功を収めた、という見方も可能である。

114) Mann, Thomas: Von Deutscher Republik, in: Gesammelte Werke, Bd.11, Frankfurt am Main 1960, S.828-831, s. Mann, Thomas: Kultur und Sozialismus, in: a.a.O., Bd.12, S.648f..

ことを問題視したわけである。イエーガーの「第三の人文主義」は彼なりの仕方、この文化と政治という異なった領域を架橋しようと試みた¹¹⁵⁾。しかし彼による政治は具体的な内容を欠き¹¹⁶⁾、文化の内容は慣習的で、同時代の新しい文化運動と積極的な関わりを持とうとしなかった。こうした文化的な急進主義と政治的な自由主義との結び付きを構想し、実現することこそ、「第三の人文主義」を、学問と学校教育の架橋に留まらず社会的により広がりのあるルネサンスへと導いたかもしれない¹¹⁷⁾。しかしイエーガーが当時の教養市民階級の大多数と共有した国民保守主義的な背景は、文化的な急進主義と政治的な自由主義とを適切に見積もるのみならず、両者を結合することを妨げた。後者の政治的な自由主義は新人文主義の伝統から、前者の文化的な急進主義はニーチェから汲み出すことができたにもかかわらず。

謝辞：本論は、筆者が2014年2月10日マールブルク大学歴史学－文化学科で行った、”Werner Jaegers “Dritter Humanismus” und seine Wurzeln” という講演の準備原稿を日本語に直し、それに大幅な加筆訂正を施したものである。この講演を企画・準備してくださったマールブルク大学同学科のウルリヒ・ジーク、エッカルト・コンツェ両教授、また講演原稿のドイツ語をチェックしていただいたウルリヒ・ニッゲマン博士に心から感謝を申し上げる。

Danksagung: Ich bedanke mich herzlich für Prof. Dr. Ulrich Sieg und Prof. Dr. Eckard Conze, die meinen Gastvortrag, der am 10. Februar 2014 im Fachbereich 06 Geschichte und Kulturwissenschaften an der Universität Marburg gehalten wurde, organisiert haben. Mein aufrichtiger Dank gilt noch für Dr. Ulrich Niggemann, der das Manuskript meines Vortrags gelesen und korrigiert hat.

115) 「人文主義は、無条件に政治的な出来事 Politikum です」(Jaeger, W.: Die geistige Gegenwart der Antike, a.a.O., S.162.) s. Jaeger, W.: Staat und Kultur, a.a.O., S.200.

116) 「『パイデイア』第1巻において描かれたような」人文主義はまさに非政治的である。なぜならそれは政治に仕えずーあるいはまさにあらゆる政治に仕えるがゆえにー、常に言葉だけの営みに陥る危険にあるからである」(Snell, Bruno: Besprechung zu W. Jaegers Paideia [1935], in: Gesammelte Schriften, Göttingen 1966, S.54.)

117) エルンスト・R・クルツィウス『危機に立つドイツ精神』(1933年)の以下の一節は、「第三の人文主義」への批判として読める。「人文主義は大学での議論、教育学的なプログラムから蘇ることはないだろう。かかる再生は生の非常に強力な濃密化、創造的な集中性からのみ起きるだろう。(中略)新しい人文主義は精神性のみならず、感覚性を意味しなければならないだろう」(Curtius, Ernst R.: Deutscher Geist in Gefahr, Stuttgart/Berlin 1933, S.115.)